［翻訳］エーテル・コッハー／ハンス・アマン著
『アンリー・デュナン ― 波瀾万丈の生涯と驚異的ヴィジョン ―』(1)

九頭見　和　夫

本書は、「赤十字」の発議者、かつ不撓不屈の共同設立者、についての短い伝記である。その経歴は、信じがたいような人生の浮き沈みを示している。偉大な人道主義者は、私たちのためにこの世界において平和に共同生活するための諸々の原則を残したのである。

私たちは、アンリー・デュナン生誕175年に、本書の出版を可能にした、ヘリザウ・シュタイネッグ財団の寄付に対し、アペンツェル・アウサーホーデン州教育・文化課の宝くじ基金からの援助に対し、感謝する。

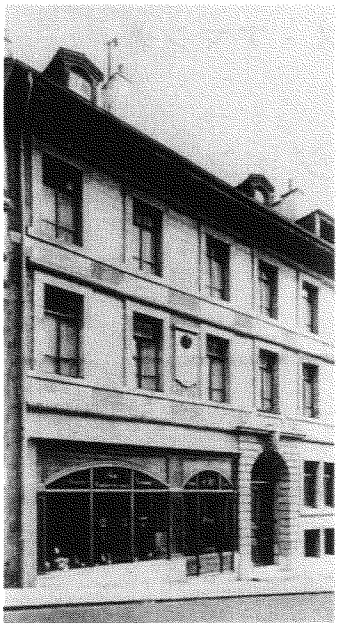
目　次

1．ジュネーヴ、1828年５月８日
2．お人好しの植民地入植者
3．皇帝の後を追って
4．『ソルフェリーノの思い出』
5．「国際赤十字」の創設
6．スター、そして転落へ
7．極貧、それでも人類の幸福のための義務を負って
8．シュトュットガルトの友人たち
9．ハイデン、新しい故郷
10．再び脚光を浴びて
11．調停者として最高の国際的な栄誉
12．死に至るまでより良き世界のために尽力して

1．ジュネーヴ、1828年５月８日

この木曜日の夕方、ヴェルデン通り268番地（今日では12番地）の上流家庭は、大きな安堵と非常な喜びの中にあった。華奢なアンヌ＝アントワネットが、たった今８時30分に、最初の子供である男の子を無事出産したのである。その翌日ローヌの町で名望を集める３人の市民が、ジャン＝アンリ・デュナンの出生を報告し、出生証明書にサインをするため、戸籍役場に姿を現した。誇らしげな父ジャン＝ジャック・デュナン、彼は大成功を収めた実業家。幸せな祖父アンリ・コラドン、彼は有名な研究者で政治家、新しく生まれた子供に名付け親として自分の名前を与えた。第二の名付け親、叔父のダヴィド・デュナン、彼は書籍商、愛国的なジャーナリストで道徳主義者。

幼ないアンリは、生まれ故郷の町が平穏な時代に誕生した。ジュネーヴ市民が、貴族支配から政治的権利を奪取した、血なまぐさい混乱は終わりを告げていた。1798年、ナポレオン一世による領土の併合、その後に続いたフランス人による経済的搾取も克服されていた。誇り高い都市国家ジュネーヴは、1815年、自由主義的なスイス連邦に加入し、このことで政治的な安全を維持した。さて有名な科学と芸術の研究所を有するこの大学都市では、商業や工業も再び開花した。原動力としては、神は勤勉を愛し無為を罰するというカルヴァン派の宗教的信条が影響を与えた。貧しいものは自己の現状に責任がある。この教義は、当然のことながら工業化が始まった時には労働者の社会



ジュネーヴのヴェルデン通りにあるデュナンの生家。ブロンズ製のレリーフがはめ込まれた記念額がここですごした生後数ヵ月を思い起させる。

晩年のアンリー・デュナンの両親、ジャン＝ジャックとコラドン家出のアンヌ＝アントワネット

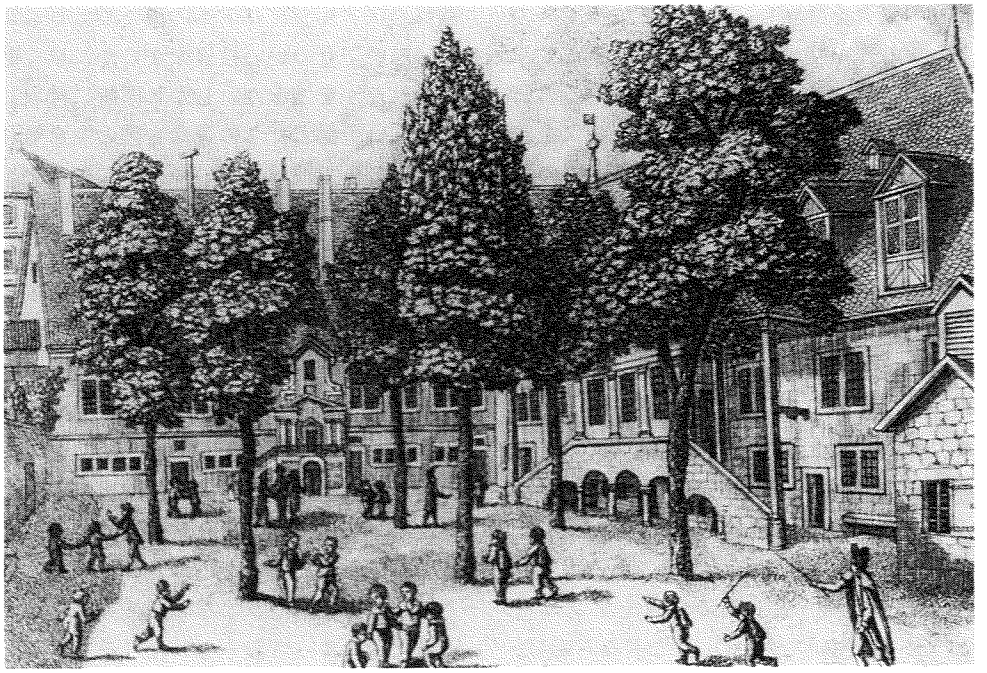
的困窮を阻止することが出来なかった。その結果ジュネーヴにおいても飢えた人々、乞食、孤児の数が増大した。

アンリが生後6ヵ月の時、両親は、現在のジュネーヴ＝コルナヴァン駅の近くにある、新たに改築された別荘「ラ・モネ」に引っ越した。ここで、その後の6年間に、4人の兄弟、ソフィ＝アンヌ、ダニエル、マリーそしてピエール＝ルイが誕生した。領地は大きく、湖、町、モンブランへの眺望を妨げるものは何もなかった。デュナンは、生涯を通して幸せな子供時代をすごしたこの場所のことをよく覚えていた。「私の父は、いろんな所にある領地に、珍しい球果植物を栽培させていた。彼は、特別な香りで領地を飾るのが喜びであった。このことが、彼には特にお気に入りの気晴らしであった。なぜなら我が家が彼には何よりも大切だったからである。公園は果樹がいっぱいで、極上の果実を、これまでどこにも見い出せなかった果汁たっぷりで甘美な果実を、もたらした。ここはまた、日の光を浴びて、草の中や苔の下で、ニオイスミレがたくさん生育していた場所でもあった。」

デュナンの両親は、とても愛情豊かで、父が大がかりな商用旅行のためしばしば長い間留守にし、非常に繊細な母が不安定な健康状態からしばしば寝込まねばならなかったにもかかわらず、子供たちのためになごやかな家庭生活を営んでいたのである。

父ジャン＝ジャックは、円満な性質であった。彼の場合には、忍耐力、公正さ、信頼性と、責任感や他人を配慮する能力とが結び合わされていたのである。彼は、自分の職業を、子供のいないマルセーユの叔父の商社で駆けだしからたたきあげ、広範囲にわたる旅行によって磨きをかけた。叔父は、ジャン＝ジャックを単独相続人に指名し、彼にジュネーヴ市内外にある会社も家屋敷も提供した。37歳の時彼は、所帯をかまえるため故郷の町に戻った。一年後彼は、「ナンシー」という呼び名をもつ、10歳若いアンヌ＝アントワネットと結婚した。彼女は、黒い目と清潔な外観をもつ小柄で優雅な女性で、決して美人ではないが柔和で、何事にも熱中し、貴族階級にもかかわらず控え目であった。

上流階級の多くのジュネーヴ人と同様に、デュナンの両親も、信仰復興運動「レヴェイユ」を基礎として、1830年にルイ・ゴーセンによって設立された福音主義協会のメンバーであった。ゴーセ



アンリが、10才の時にギムナジウムの生徒として入学した「コレージュ・カルヴァン（カルヴァン学校）」
＊コレージュ：現在では公立で11才以上の生徒を対象とする中等課程の学校。（訳者注）

ンは、聖書を字義通りに解釈し、聖書に収録されている予言でもって聴衆を熱狂させた。非常に敬虔で慈悲深い「ナンシー」は、牧師にとってよく気のつく生徒であった。デュナンの晩年の著書やスケッチから、彼が幼少年期にゴーセンの宗教的な考えによって強い影響を受けたことが推測される。アンリは非常に感じやすく、正義に対する考えをはっきりと示した。彼は母を非常に愛し、母のお供をして下町の汚い裏庭に住む貧乏人や病人を定期的に訪問した。彼の父も自分の時間の一部を公共福祉のために用いた。彼は、立法府の一員であると同時に市の後見裁判所の一員でもあった。

宗教の科目を除くと、アンリは良い生徒ではなかった。学校では彼は第4学年を繰り返さねばならなかった。学校時代を彼は、家庭教師による補習教授で終えた。慈善協会の若いメンバーとして彼は、今や一人で貧乏人や囚人を訪問し、彼らに聖書や説教のためのテキストを読んで聞かせた。19歳の時にアンリは、リュラン・ソテ銀行で見習いを始め、成果を挙げて終了した。その後この美貌で富裕な若者を駆り立てたのは、地上に楽園を樹立することであった。この目標のために彼は、職業訓練の間の余暇を全て利用した。考えを同じくする人たちと彼は、毎週木曜日の夜落ち合い、聖書研究、討論、祈祷を行なった。彼の熱意を手助けしようとする動きが他の人々に広がった。その他にも彼は、弱者や不満を持つ人々を元気づけ、引き裂かれた仲間を新たに結びつける能力も持っていた。アンリ・デュナンの木曜会は、ジュネーヴにおける唯一の宗教的、社会的な傾向を有する青年会ではなかったが、おそらく最も精力的な青年会であった。なぜならこの青年会から、1852年11月末、「ユニヨン・クレティエンヌ・ドゥ・ジュネーヴ（ジュネーヴ・キリスト教連合）」、すなわち「ジュネーヴ・キリスト教青年会（CVJM）」が誕生したからである。デュナンは通信係と会議の記録係の役割りを引き受けた。彼は、フランスやイギリスの類似のグループと文書で接触を取り

始め、相互の会合を計画し、近接するフランスの地域にさらなる「キリスト教青年会」を形成すべく周囲を鼓舞した。彼の広範囲にわたる文通は、イギリスからベルギー、オランダ、フランスを越えてレバノンにまで、いなアメリカ合衆国の住所にすら拡大した。デュナンの念頭には、若いキリスト教徒の世界規模の親睦が浮かんでいた。この夢のために彼は、銀行の見習いを終えた後も全力を傾けた。自分の費用で彼は、提携を話し合うため外国のいろんな青年会を訪問し、同盟の世界組織のために奮闘した。この組織は、全く彼の構想通りに「キリスト教青年会世界同盟」として1855年パリに実現した。最後の二年間デュナンはもちろんもはや第一線で活動してはいなかった。全く別の課題が彼をとらえていたのである。

デュナンは、1853、54年以降名前をアンリーHenryと「Y」を用いて書いた。「なぜなら私は、…新しいジュネーヴの住所録のたくさんあるデュナンの中に、「アンリ・デュナン」靴の縫い子、を発見したからである。きっとりっぱなこの女性は、サン＝ジェルヴェ、すなわち過激派の人たちの居住地に住んでいて、私はこの過激派の人たちと間違われたくなかった」と著書で彼はコメントしている。

2．お人好しの植民地入植者

ヨーロッパで植民地化熱が噴き出した。1830年から1840年の間にフランスは、何度か出兵しアルジェリアを征服した。経済は強力な活力を得た。なぜなら投機的な投資が行なわれたからである。このことで、その所有者の大半が「レヴェイユ」に所属しているジュネーヴの銀行も利益を得た。迅速に多くの利益を得ることは、彼らにとって決して嫌悪すべきことではなかった。なぜなら彼等の考えによれば、「物質的に裕福であることの徳が慈善の徳を堅固にする」からである。アンリー・デュナンは、1853年銀行の二人の顧客から、スイス西部の農業労働者のために10の村を建設する目的を持ってセティフ地区を視察するよう依頼された。アルジェリアへの種々の旅行によって彼は、思い切りのいい投資家がいかに早く財産を手に入れたかを知った。しかし同時に搾取し尽された新しい労働者たちの運命も彼の頭を離れなかった。ところで彼はまたいつも手に聖書を持ち、イスラム教の住民を説得して福音書に誘い込もうと試みた。彼は自分を、神の望む模範的なケースとみなしたのか、すなわち人間らしく部下を扱っても容易に大金が得られることを証明しようとした植民地支配者とみなしたのか。諸々の記録がこの方向を指し示している。いずれにしても彼は新しい社会に完全に身を投じたのである。デュナンは、小麦粉を製造しヨーロッパに輸出できるようにするため、土地を手に入れ、近代的な製粉装置の製造を委託した。そのための資金を彼は、親戚や知人のもとで集めた。すなわち彼らは正体不明の共同経営者によって設立された「モン・ジェミラ製粉会社」のために50万スイス・フラン（今日の価値は12倍以上）の株を引き受けたのである。デュナンは10%の利回りを約束し、人々は彼の言葉を信じた。しかしパリの所轄の官庁は、彼の会社のために土地や水をほとんど割り当てることをしなかった。デュナンは、繰り返し訪問し、嘆願書をつぎつぎに提出し、コネにものを言わせることをし、フランス国民にすらなり、アラビア語を学んだ。しかし成果はなかった。彼が1857年に行なったチュニジア旅行の後に出版した著書『チュニスの摂政政治』も、この著書がこの国の現在の地理、経済、文化について詳細に記述しているにもかかわらず、植民地省に取り入ることは出来なかった。貴重な時間が浪費した。株の配当は行なわれなかった。

デュナンは絶望的になった。一番高い身分のフランス人だけが植民地省をせきたてることが出来ると考え、その時彼はナポレオン三世のことを思い浮かべた。フランスの皇帝に選ばれたナポレオン一世の甥は、青少年時代をトゥールガウ州のアレーネンベルク城ですごし、トゥーンのデュフール将軍のもとで軍事訓練を修了した。彼はスイス国民に好意を持っていて、かつての教師やその他のジュネーヴの人たちとも友好的な関係を維持し

ていた。デュナンは、素早く巧みにペンを走らせ、最も新しい著書を皇帝に献上した。なおこの著書には、「再興されたカール大帝の帝国、あるいはナポレオン三世皇帝陛下によって復興された神聖ローマ帝国」という仰々しい題名が付けられていた。この追従の論文は、「ダニエル書」を拠り所にして、新しい皇帝が、革命的なヨーロッパを統一し、永続的な平和と裕福さのある時代を始めるために選抜されたことを、証明するものであった。

3．皇帝の後を追って

新たに印刷された本とアルジェリアへの種々の心配を胸に、デュナンはナポレオン三世のもとへと向かった。パリで彼は、皇帝が大群を率いて解放戦争のため上部イタリアに滞在していることを耳にした。サルディニア王ヴィットリオ・エマヌエーレ二世は、イタリアからオーストリア人を駆逐するためのパートナーとしてナポレオン三世を味方につけることができたのである。デュナンは、イタリアで皇帝を訪問する決心をした。白い植民地服と熱帯用ヘルメットを身につけて彼はブレッシアに向かった。馬車での数日の旅行の後この地に到着した彼は、ナポレオンが宿営地を南東に移動したことを知るが、そこガルダ湖の下流では皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の指揮するオーストリア軍との決戦の準備が整えられていた。苦労の末デュナンは、自分を戦場につれていってくれる御者をみつけた。本道を通過する軍の補強物資のために、彼らは何度も走りにくい回り道へと追いやられた。御者は何度も旅行の継続を拒否したが、デュナンはお金で気持ちを変えさせた。6月24日、一日中彼らの後に付いてきて常に大きくなり続けていた砲声が遠くの方に聞こえた。死ぬほど疲れて彼らは、日没後小さな市場町カスティリオーネ・デレ・スティヴィエーレに到着した。その小さな町にたった今勝利を収めたフランス人とサルディニア人が戦場から帰還した。しかし今やデュナンは、恐ろしい光景に遭遇した。通りの端、広場、そして教会には、様々な軍服を着た負傷兵の身体が累々と横たわっていた。がたつく荷車で次々とさらなる犠牲者、生命のある者、死亡している者、が運ばれてきた。デュナンは、彼の時代における最大の軍事的対決で犠牲になった人々と情け容赦なく対面させられた。1859年6月24日の朝、東西から押し寄せた各々15万人の兵がソルフェリーノで対峙した。夕方4万人の死者と負傷者が戦場に横たわった。デュナンはショックをおさえて、すばやく手を差し伸べた。彼は、重傷者を積み込む手助けをし、食料の残りや煙草を分け与え、うめき声をあげる者たちには励ましの言葉をかけ、死にかけている者たちには彼がそばにいることを感じさせた。翌朝デュナンは、包帯の材料、食料、薫製品を買うために、御者をブレッシアに遣わした。彼自身は、再び横たわっている犠牲者や死にかけている者たちの世話をした。彼は、持ってきたシャツを切って包帯用ガーゼにし、汚れた傷を洗いきよめ、喉が渇いている者たちに新鮮な水を与えた。専門家の救護が至る所で不足していたため、デュナンはこの土地の人々に助けを求めた。彼らは、この白衣を着たよそ者が、決して好奇心を持った観戦者ではなく、献身的に手助けし、驚くべきやり方で自国民のみならず敵陣営の犠牲者にも立ち向かっていることに気が付いた時、多くの女性や子供、さらには少数の男性も彼の仲間になった。「ソーノ・トゥツティ・フラテツリ」(みんな兄弟) と彼らは互いに言い合い、どの負傷者も彼らの国籍に関係なく同様に注意深く世話をした。デュナンと共に任意で参加したサマリア人たちは、戦争の犠牲者はみな中立で、それ故等しく扱われねばならないという、後の「赤十字」の基本的原則を実践した。

デュナンは、近くに捕虜になった医師がいることを知った。彼は、これらのオーストリア人を重傷者の生命を救うために釈放し診療にあたらせることをフランス人の将校に求めたが、このことについては皇帝の同意が必要という答えが返ってきた。彼は長くは考えなかった。彼は皇帝の宿営地に行ったが、謁見を許可されなかった。つてのおかげで彼は、願いを少なくともナポレオンの副官

フランスの皇帝
ナポレオン三世（1808年－1873年）

に伝えることが許された。同時に彼は、副官に「再興された帝国」について記した著書を手渡し、ナポレオンへの取り次ぎを依頼した。皇帝は、要望された捕虜の医学生や外科医を釈放するため極めて迅速に指令を発した。彼は献上された著書の受け取りを丁重にことわり、著書の公刊を禁止した。このことは、請願者にとって深刻な打撃であったが、現在の彼にはモン・ジェミラの製粉所よりも負傷した兵隊たちの方がより重要であった。デュナンは、ジュネーヴのドゥ・ガスパラン伯爵夫人あてに救援のための訴えをしたためた。この訴えは、7月9日付の「ジュルナル・ドゥ・ジュネーヴ（ジュネーヴ新聞）」に掲載され、その結果設備の十分でない戦闘地域の入院患者たちに器材が提供されることになった。

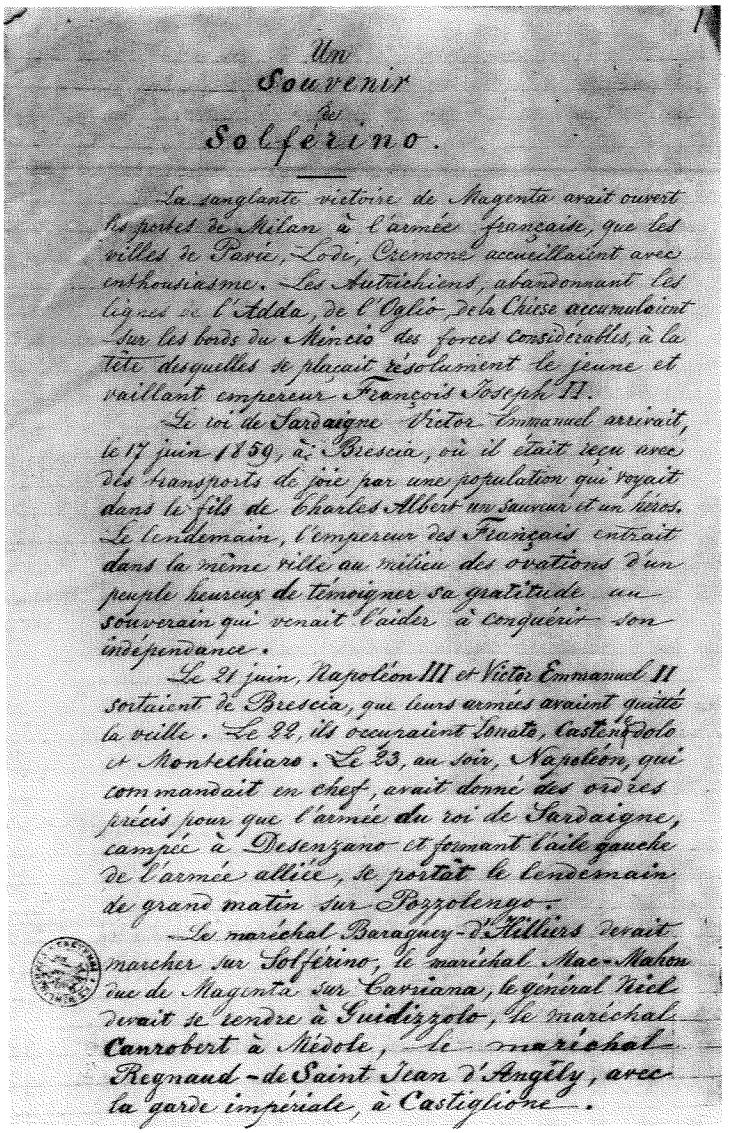
7月末デュナンは、カスティリオーネではもはやいかなる任務もなくなったため、ミラノの慈善協会の招きに応じた。彼は、ミラノの上流社会の多くのサロンで、ソルフェリーノの体験をまるで目に見えるように話した。力をこめて彼は、死にかけている一般の兵隊たちの非難のこもった訴えを、何度も繰り返し話した。なぜなら彼らは、祖国のために勇敢に戦った後、放置され、出血多量で死んだからである。デュナンの目には、軍の野戦病院が完全に拒否したことは、明らかであった。

ジュネーヴとパリに戻ったデュナンは、アルジェリアの商売に心をくだき、わずか数ヵ月後には第二の滝と容易に水がひける追加の土地の配分を受けた。このことのために彼は、新たに資金を調達せねばならなかった。信頼を寄せる彼の友人仲間がさらに50万フランの株を購入した。デュナンは、再びバラ色の光の中にアルジェリアを見、新しい施設の獲得に努めた。森、採石場、鉱山。しかし戦争によって負傷した人々の問題が彼の心を苛んだ。彼はジュネーヴの住まいに戻り、二年間憑かれたように新しい著書の執筆に取り組んだ。

4．『ソルフェリーノの思い出』

デュナンは、当時のヨーロッパ社会に衝撃を与えたこの本に、「アン・スヴニール・ドゥ・ソルフェリーノ（ソルフェリーノの思い出）」という題名をつけた。この本は、今日においてもなお内容の構成と人の心に訴える効果の点で傑作と見なされている。文学的には、リアリズム（写実主義）のさきがけとなったのである。

叙述は、歴史の概説から始まる。軍、兵力、将校、戦略について詳細に報告される。その後で、戦闘の経過、大量殺戮、個々の将校の勇敢な最後が英雄叙事詩の形式で、それも完全に戦争を壮大なドラマとして取り上げた19世紀のルポルタージュ形式で叙述される。戦闘を体験しなかったデュナンは、確かな証拠書類を拠り所に、目撃者、将校、専門家から戦闘の経過について情報を得た。



Un
Souvenir
de
Solférino.

La sanglante victoire de Magenta avait ouvert les portes de Milan à l'armée française, que les villes de Parié, Lodi, Cremone accueillaient avec enthousiasme. Les Autrichiens, abandonnant les lignes de l'Adda, de l'Oglio, de la Chiese accumulaient sur les bords du Mincio des forces considérables, à la tête desquelles se plaçait résolument le jeune et vaillant empereur François Joseph II.

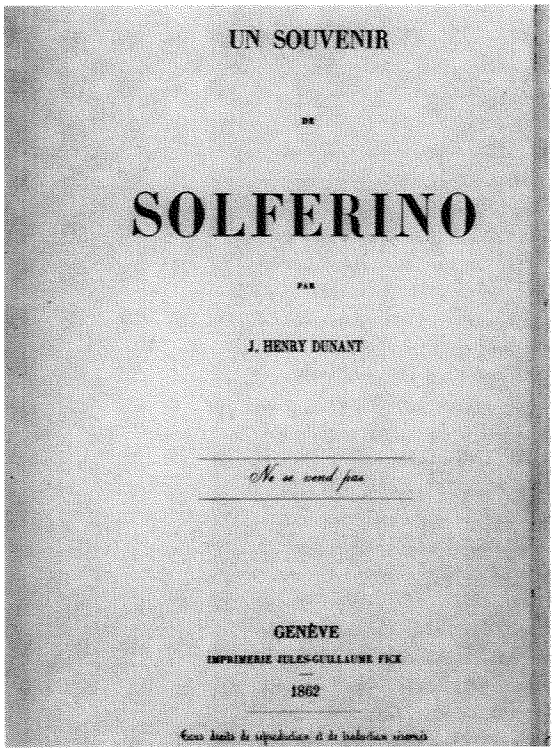
Le roi de Sardaigne Victor Emmanuel arrivait, le 17 juin 1859, à Brescia, où il était reçu avec des transports de joie par une population qui voyait dans le fils de Charles Albert un sauveur et un héros. Le lendemain, l'empereur des Français entrait dans la même ville au milieu des ovations d'un peuple heureux de témoigner sa gratitude au souverain qui venait l'aider à conquérir son indépendance.

Le 21 juin, Napoléon III et Victor Emmanuel II sortaient de Brescia, que leurs armées avaient quitté la veille. Le 22, ils occupaient Lonato, Castenedolo et Montechiaro. Le 23, au soir, Napoléon, qui commandait en chef, avait donné des ordres précis pour que l'armée du roi de Sardaigne, campée à Desenzano et formant l'aile gauche de l'armée alliée, se portât le lendemain de grand matin sur Pozzolengo.

Le maréchal Baraguey-d'Hilliers devait marcher sur Solférino, le maréchal Mac-Mahon sur Magenta sur Cariana, le général Niel devait se rendre à Guidizzolo, le maréchal Canrobert à Médole, le maréchal Regnaud-de Saint Jean d'Angély, avec la garde impériale, à Castiglione.

デュナンによる『ソルフェリーノの思い出』の第一ページの清書

一敗地にまみれたオーストリア人が大急ぎで退却したことを叙述した後に文章のスタイルが一変する。戦勝国の凱旋については一言も触れられず、「夕暮れの影を落とす中で多くのフランス人兵士が、仲間や同郷人や友人をさがし求めている」様子がたんたんと報告される。この後に、傷ついた手足と頭、血と泥の中を転げ回る身体、ぐしゃぐしゃにつぶれた顔、見開いた目、叫び声を発する硬直した口、このようなリアルな光景が続く。負傷者輸送の原始的で粗暴なやり方、移動診療施設や病院の容易ならぬ状況、麻酔剤なしの足の切断、を人々は具体的に知るのである。犠牲者の罵り、叫び、うめきについても語られる。教会や路地を覆っている血と汗による悪臭すら秘密にはされない。葉巻の煙で、吸い込む空気を我慢できるものにしよう、という試みが当時行なわれた。瀕死の


UN SOUVENIR

DE

SOLFERINO

PAR

J. HENRY DUNANT

Ne se vend pas

GENÈVE

IMPRIMERIE JULES-GUILLAUME FICK

1862

「赤十字」設立の頃のアンリー・デュナン

父親たちの心配ごと、乗り損ねた人生についての若者たちの嘆きの言葉、そして両親・妻・婚約者に対する聞き取れないほど小声でささやく最後の別れの言葉、を読者は耳にするのである。これほど印象的に正直に戦争の暗い面が読者に明らかにされたことは、これまで決してなかった。新聞や本に掲載されたスケッチや絵によるイラストも、常に勇気や英雄的な行為を強調していた。

最後のページをデュナンは、自分のヴィジョンのために用いた。「平和な時に自由意志に基づく（篤志の）救助団体を設立することはできないだろうか。その目的は、戦時における負傷者が、このような仕事に特に適している、熱中して献身的に働ける志願者たちによって世話される、というものでなければならない。」デュナンは、戦争が一層残虐性を増した武器を用い、ますます犠牲者を増加させるだろうという前提から出発する。他方においてデュナンは、一般市民が、隣人愛から自ら篤志の看護人になるための教育を十分に受け、全ての交戦国から承認され支持される場合には、野戦病院に身を投じ得ることを、確信していたのである。それ故彼は、自らの著書を以下のような友好的な内容の（ここでは短縮された）アピールで終えた。「ヨーロッパ諸国における〈負傷者のための救助団体〉の設立に向け、法治国家の合意を得るため、諸国の地位の高い将軍たちによる国際会議を開催することは、望み得ないことであろうか。」

（2003年10月16日受理）

使用テキスト

本稿は、Ethel Kocher & Hans Aman : Henry Dunant. Sein wechselvolles Leben und seine erstaunlichen Visionen. Henry-Dunant-Museum Heiden, 2003.
の翻訳である。